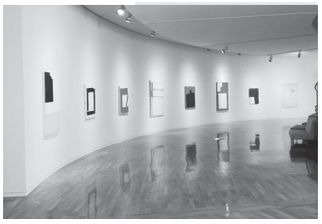
「浮田要三と『きりん』の世界」展を終えて



一般社団法人ぷれジョブ　理事　宮尾　彰

児童詩誌『きりん』の編集発行者　浮田要三

2022年9月17日（土）から11月13日（日）まで、南佐久郡小海町松原湖畔の小海町高原美術館を会場に開催された展覧会「浮田要三と『きりん』の世界」に一般社団法人ぷれジョブとして企画協力しました。

以下に、展覧会開催に向けた案内文を転載します。

> 人間とは、悲しみの塊である。その哲理を体得して、行為する作品を制作する。それが正に「生」そのものと考える。手段ではない。生きている證としての作品の制作こそが、人間の本業と心得て生ある限り生きるべきだと思っている。
>
> （浮田要三）

1947年、大阪梅田の尾崎書房に就職。井上靖、竹中郁、坂本遼、足立巻一らが興した児童詩誌『きりん』の編集・発行に盟友星芳郎と共に14年に亘り従事する。毎月同誌の表紙絵に児童画を選ぶ浮田の眼を吉原治良が認めたことから『具体美術協会』に参加。1962年、『きりん』との関わりを離れ、以後1983年盟友嶋本昭三の招きにより渡欧し制作を再開するまでを市井の袋工場経営者として過ごす。晩年に再燃した創作へのエネルギーは尽きることなく、解き放たれた精神性を湛えた作品を多数遺した。

本展では、浮田がその若き日に情熱を懸けた児童詩誌『きりん』（オリジナル）166点と共に、その画業を網羅して展覧する。同時に、本展を『子どもと大人が対等な関係で向き合う文化』を再考する機会としたい。

展覧会を企画する

私たち法人にとって、美術展の企画にかかわるのは初めての経験でした。2021年秋には、名取淳一館長、中嶋実学芸員とご一緒に大阪府茨木市に浮田綾子夫人と長女の小﨑唯さん、親しく交流された猿澤恵子さんのお三方を訪問し、展覧会の概要について意見交換をしました。その際、『具体』研究の第一人者で関西大学教授の平井章一先生も監修者として同席されました。

晩年浮田さんが生活された室内には何気なく大小の作品が飾られ、今でも作家の精神が漲っていました。

続けて、私たちは上田駅前の小宮山量平による私設博物館エディターズミュージアムに荒井きぬ枝代表を訪問し、展覧会の要となる児童詩誌『きりん』166冊の借用についてご快諾を得ることができました。

この企画がユニークなのは、現代美術作家浮田要三の画業の紹介に留まらず、彼が若き日に情熱を注いだ子どもたちの詩や作文や絵を集めて編集された月刊誌『きりん』の知られざる歴史と、詩人や画家たちとの刺激的な相互関係を再発見する試みである点です。

児童詩誌『きりん』を私が初めて知ったのは、2012年の春、エディターズミュージアムで量平さんの手に成る『ある沈黙』という檄文に触れた時でした。1972年通巻220号を以て休刊に入った際、氏が『きりん』の重要性と発行継続の困難とに苦悶した痛切な文章が私の心に深く刻まれたのです。その場できぬ枝さんに『きりんの絵本』の存在を教えていただき、後日巻末に記された浮田要三さん宛にお手紙を書きました。

以来、何回かの文通を経て、亡くなる半年前に法人の西代表理事と大阪今里にあったアトリエUKITAを訪問し、半日お話を聴きました。まるで昨日のことのように当時の様子を熱っぽく語る浮田さんのお姿から『きりん』という磁場に籠っていた熱気のようなものがひしひしと伝わって来ました。そこには、2003年に考案されたぷれジョブという活動の理念にも通底する人間理解が感じられました。浮田さんの言葉を借りるならば、「悲しみの塊」として存在する人間に、子どもと大人の区別など、本来不要なのです。

今回、展示の準備から会期終了まで、地域社会との接点を模索する少年がスタッフとして参加し、地味な作業を手伝いました。晩年「自分探し」を続ける若者から慕われた浮田さんの展覧会に相応しく、故人も雲の上で喜んでくれたと思います。私たちも『きりん』当時の空気を具体的に体感できました。

表紙絵のほとんどが子どもたちの作品

３部屋ある展示室には、厳選された浮田さんの作品27点と、お仲間の作品２点、遺品の帽子、『きりん』や『具体』にまつわる資料などを展示しました。

わけても、大阪時代の『きりん』全巻166冊を第一展示室奥の壁面に並べた展示は圧巻でした。これは、児童文学者灰谷健次郎氏から小宮山氏に託された貴重な資料です。氏のデビュー作『せんせいけらいになれ』（理論社）は、神戸での教員時代に担任した生徒たちの詩を『きりん』に投稿したアンソロジーでした。

小宮山氏は、死の直前にきぬ枝さんを枕元に呼び、「いいかい、一番大切なのは『きりん』だからね」と遺言されたそうです。今回の展覧会で全巻が書架から美術館に移されたことにより、『きりん』研究の新しいページが開かれた、と言っても過言ではありません。

9月17日（土）のオープニングセレモニーは、関西方面から50人余の来場者を得ました。芦屋市立美術博物館学芸員として生前の浮田さんに最も近しく親交のあった加藤瑞穂先生による「『きりん』と具体美術」と題した講演に続いて、宮尾が陰の功労者として永年『きりん』を支え続けた星芳郎氏の逸話をご紹介しました。会場には、ご親族をはじめ『浮田要三の仕事』を編集された扉野良人さん、『きりん』に詩を投稿しておられた山口雅代（美年子）さん、ギャラリー関係者ら百余名が集って、「浮田要三と『きりん』の世界」を再評価する機会となりました。

会期半ばの10月31日（日）には、『浮田さんの絵』と題して平井章一先生による特別ギャラリートークを開催しました。前半はスライドによる講義形式、後半は展示室に移動して作品について詳細な解説を拝聴し、「浮田要三から独立して存在する『モノ』を目指した」という浮田さん晩年の思索と創作の意味を学びました。

会期終了前日の11月12日（土）には、『きりん』の子どもたちの詩にメロディを付けて歌う女性デュオ・かりきりん（Vo.下村よう子・Cb.宮田あずみ）によるコンサートを開催しました。浮田さんが14年に亘り心血を注がれた『きりん』全巻の展示を背に熱演され、会場全体に『きりん』の息吹が充ち溢れました。

最終日には、飛び入り企画として宮尾が壁面に展示された166冊を『きりん』絵巻に見立て、1948年から1962年の歴史を辿る研究発表をしました。ここには、世界的にも類を見ない本質的な「教育」の足跡がありますが、その探求は未だ緒に就いたばかりです。

『きりん』は私たちに問いかける

今回の展覧会を準備する過程で、私たちはご遺族の許に遺された浮田さんの作品をはじめ、蔵書類や手稿に触れる貴重な機会に恵まれました。同時に、生前の浮田さんと親交を持たれた多種多様な方々とお会いし、豊かな包容力の内にも厳しさを湛えた故人の人となりを知ることができました。

ここで、「浮田要三と『きりん』の世界」展の報告を終えるに当たり、鉛筆で書かれた浮田さんの手に成る原稿の一節を以下にご紹介します。

> だから、ボクは言いたい。「きりん」は子どものすばらしい作品がギッシリつまっていて、それが値打ちだと言われてきましたが、本当の問題は、大人の（子どもの）作品に対する態度なのであり、それが、値打ちをうち出していたものといえます。　※（　）内は補足

引用した文章は、2008年に『きりんの絵本』を発行した時期に書かれたものと推測されます。

「本当の問題は、大人の作品に対する態度」であると書いておられるのは、かつて14年の長きにわたり毎月１枚表紙絵を選び続けた自身の経験に基づいてのことであり、けだし至言であります。

そして、これとまったく同じことが、私たちの活動ぷれジョブ® にも当てはまります。ぷれジョブ® とは、人間の根源的な感覚と直結した子どもたちの姿に触れた大人が、自らの生き方を見つめ直し、新しくされて歩き始めるための方法なのです。

宮尾　彰　一般社団法人ぷれジョブ　理事
〒384-0055　小諸市柏木7-35　090-5796-7506
◎展覧会について興味のある方は下記までどうぞ。
E-mail : miyao.0107@gmail.com